

# 名古屋市立大学看護短期大学部14年の記録

看護学部研究紀要委員会

## Brief History and Record of Nagoya City University College of Nursing from 1987 to 2002

キーワード：名古屋市立大学看護短期大学部，歴史，記録

Key words: Nagoya City University College of Nursing, history, record

### 1 はじめに

昭和63年4月に発足した名古屋市立大学看護短期大学部（以下、看護短大部とする）は、平成11年4月の名古屋市立大学看護学部発足にともない、平成13年3月に看護学科の最後の卒業生を、また、平成14年3月に専攻科助産学専攻（以下、専攻科とする）の最後の卒業生を送り出し、その14年の歴史を閉じることとなった。この間、看護学科、専攻科はそれぞれ、1,000名と160名を越える卒業生を輩出してきた。この14年間にはさまざまなできごとがあり、教員、職員あるいは学生として関わった者、それぞれに「看護短大像」があるものと思われる。この14年が長いか短いかについては、判断が分かれるところであろうが、その間の短大を取り巻くできごとをすべて、人の記憶にとどめておくことは困難であり、その意味では何らかの記録が必要である。

このように記録に残すということは、単に紙の上に文字や数値が残るということではない。その記録をベースにして、次の、新しい進歩につなげることができるという意味がある。看護学部研究紀要委員会（紀要編集委員会）ではこの点に意義を認め、平成14年度に刊行される看護学部紀要第3巻に、看護短大部の記録を資料として掲載することとし、教授会の了承を得て、ここに「名古屋市立大学看護短期大学部14年の記録」としてまとめるに至ったものである。

なお、以下に示した記録類は、看護短大部発足の昭和63年度から、看護学部が発足する前年度である平成10年

度までのものが中心である。また、評価は極力控え、記録あるいは資料としてまとめたものである。

### 2 沿革

看護短大部の沿革を表1に示した。昭和60年6月の市議会における了解に基づき、看護短大部は、昭和63年4月に看護学科100名の入学定員で発足した。その後、平成3年4月には専攻科助産学専攻を開設した。専攻科助産学専攻は、平成6年4月には、学位授与機構の認定を受けている。

その後、全国的な看護学の大学教育化の流れにも沿って、平成6年4月からは、看護短大部4年制大学化検討小委員会（平成6～7年度）における検討の結果、看護学部の設置構想が提言された。市立大学では、これを承けて、平成8年4月から、看護学部設立準備委員会及び総務、教員選考、教務、入試の各専門部会において検討が開始された。その結果、平成11年4月、名古屋市立大学看護学部が開設され、看護短大部は、発展的に解消されることとなった<sup>1</sup>。

看護短大部の教育理念は、「看護に関する高度な専門的知識および技術を教授研究し、豊かな教養および人格を備え、社会の保健医療の向上に寄与しうる人材を育成する。」と定められていた。また、この教育理念に基づき、「学生が人間尊重の理念に基づく看護の役割を認識

1 この間の状況については、「市立大学50周年の歩み」も参照されたい。

## 名古屋市立大学看護短期大学部14年の記録

し、高度な専門的知識および技術に支えられた看護を実践し、将来社会に貢献することができるように育成することを目標とする。」という教育目標が設定されていた。

### 3 入学試験の志願者数、合格者数、入学者数

看護短大部の入学試験は、看護学科・専攻科ともに、推薦募集はせず、一般選抜のみで行われていた。看護学科の入試科目は、国語Ⅰ・Ⅱ（漢文を除く）、数学Ⅰ、理科（化学、生物から1科目選択）、英語であった。表2に看護学科の入学試験の志願者数、合格者数および入学者数の年次推移を示した。志願倍率は初期に高く、その後やや低下したものの、平成7年度以降再び若干上昇した。入学者のうち、概ね90%以上が「現役」で占められ

ていた。

専攻科の入学試験は、基礎看護学、小児看護学、母性看護学に英語を加えて実施されていた。表3に専攻科の入学試験の志願者数、合格者数および入学者数の年次推移を示した。志願倍率は、2.6倍～9.3倍であった。入学者は、一部を除いて、ほとんどが看護学部、看護短期大学からのストレート進学者であった。

### 4 教授方法の工夫・研究

近年、大学教育における教授方法の工夫・研究などのファカルティ・ディベロップメント（Faculty Development）の重要性が指摘され、研修会なども盛んに開催されている。看護短大では、これに先立ち、自己点検・

表1 名古屋市立大学看護短期大学部の沿革

年月	事 項
昭和54年3月	名古屋市立大学整備計画において短期大学構想が懸案整備事項として取り上げられた
昭和57年4月	昭和57年度予算に医療技術短期大学部創設のための調査費が計上されると同時に、看護短期大学部創設に関する全学的調査検討機関として、医療技術短期大学部設置検討委員会が発足した
昭和60年6月	名古屋市議会において名古屋市立大学看護学校と名古屋市立看護専門学校を統合し、名古屋市立大学看護短期大学部を設立することが了解された
昭和62年12月	名古屋市立大学看護短期大学部の設置認可
昭和63年4月	名古屋市立大学看護短期大学部の開設（入学定員 看護学科100名）
平成3年4月	名古屋市立大学看護短期大学部専攻科助産学専攻の設置（入学定員 助産学専攻15名）
平成6年4月	専攻科助産学専攻が学位授与機構の認定を受ける
平成6年4月	看護短期大学部内に四年制大学化検討小委員会を設置
平成8年4月	名古屋市立大学に看護学部（仮称）設立準備委員会を設置
平成10年6月	名古屋市立大学看護学部設置認可申請を提出
平成10年12月	名古屋市立大学看護学部の設置認可
平成11年4月	名古屋市立大学看護学部の開設（入学定員 看護学科80名）、看護短期大学部看護学科の学生募集停止
平成13年3月	名古屋市立大学看護短期大学部看護学科の廃止
平成14年3月	名古屋市立大学看護短期大学部専攻科助産学専攻の廃止

表2 看護学科入試状況

(単位:人)

年度		昭和63	平成1	平成2	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10
入学定員	A	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
志願者数	B	941	783	601	579	457	518	341	717	645	849	563
志願倍率	B/A倍	9.4	7.8	6.0	5.8	4.6	5.2	3.4	7.2	6.5	8.5	5.6
受験者数	C	720	648	481	470	379	422	288	574	559	791	486
合格者数	D	110	110	110	110	110	110	110	110	115	115	115
合格倍率	C/D倍	6.5	5.9	4.4	4.3	3.4	3.8	2.6	5.2	4.9	6.9	4.2
入学者		100	100	97	96	100	100	100	100	100	99	103
入学者内訳	現役	85	91	89	87	98	96	89	94	95	95	94
	浪人	15	9	8	9	2	4	11	6	5	4	9

評価の一環としてではあるが、「教授方法の工夫・研究」について、専任教員だけではなく、非常勤講師にも協力を呼びかけて調査を行い、その結果は、「きのう・今日・明日—自己評価報告IV—」(1995)<sup>1)</sup>に掲載されている<sup>2)</sup>。調査項目は、①教員が行っている教授方法の工夫・研究の状況、②授業の内容・進め方などについて学生から評価を得ることについての意見、③教授方法の工夫・研究についての考え、各教員独自の工夫について、の3点であった。この取り組みは、比較的早くに行われていたものの、その後の教育改善の組織的な取り組みには必ずしも結びついておらず、その点は残念である。

## 5 卒業生の進路、国家試験合格状況

### 1) 卒業生の進路

表4に看護学科卒業生の、卒業時点での進路状況を示した。およそ70%強の卒業生が就職し、20%前後(多い年では、30%を超えた)の卒業生が進学している。就職者のうち70%前後以上は、名古屋市内で就職し、その多くは市立大学病院に職を得ていた。また、進学者の大半は、助産婦学校(短大専攻科を含む)、保健婦学校(短大専攻科を含む)に進学していた。

表5には専攻科卒業生の、卒業時点での進路状況を示した。初期の卒業生の中には、さらに進学した者もあったが、平成6年度以降の卒業生は全員就職していた。就職先は、看護学科とは異なり、市内、県内、県外と多様であった。

表3 専攻科助産学専攻入試状況

(単位:人)

年度		平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13
入学定員	A	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15
志願者数	B	37	64	80	96	113	111	53	55	139	106	60
志願倍率	B/A倍	2.5	4.3	5.3	6.4	7.5	7.4	3.5	3.7	9.3	7.1	4.0
受験者数	C	36	62	73	92	107	101	51	47	120	97	56
合格者数	D	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15
合格倍率	C/D倍	2.4	4.1	4.9	6.1	7.1	6.7	3.4	3.1	8.0	6.5	3.7
入学者		15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15
入学者内訳	現役	14	14	13	12	13	13	10	12	13	14	12
	浪人	1	1	2	3	2	2	5	3	2	1	3

表4 看護学科卒業生進路状況

年度		平成2	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12
卒業者数		96	96	88	101	97	98	98	95	100	99	100
就職者数		78	73	74	74	63	71	73	71	75	71	83
進学者数		17	20	13	23	32	25	21	22	23	26	13
その他		1	3	1	4	2	2	4	2	2	2	4
就職者の内訳	市内	61	64	63	66	60	63	61	52	61	57	59
	県内	11	3	5	6	1	6	7	9	7	10	15
	県外	6	6	6	2	2	2	5	10	7	4	9

表5 専攻科助産学専攻卒業生進路状況

年度		平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13
卒業者数		15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	14
就職者数		12	13	13	15	15	15	15	15	14	15	14
進学者数		3	2	2	0	0	0	0	0	0	0	0
その他		0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
就職者の内訳	市内	9	6	7	10	10	9	7	9	7	7	3
	県内	0	3	4	2	4	4	4	2	1	3	6
	県外	3	4	2	3	1	2	4	4	6	5	5

2 調査結果については、「きのう・今日・明日—自己評価報告IV—」を参照されたい。

## 名古屋市立大学看護短期大学部14年の記録

## 2) 国家試験合格状況

表6には看護学科卒業生の国家試験合格状況を示した。新卒者では、合格率は96%以上となっており、100%合格という年度も4回あった。なお、平成12年度の卒業生で第90回国家試験に不合格であった者4名のうち、平成14年の第91回国家試験を受験した者は、3名であり、残りの1名については確認できていない。この1名以外は、新卒の際に不合格であっても、翌年度以降に合格していると考えられる。

表7には専攻科卒業生の国家試験合格状況を示した。専攻科は、11回の新卒者のうち、8回は卒業生15名全員

が合格していた。新卒の際に不合格であった者も、平成13年度卒業以外の2名については、翌年度の国家試験で合格していた。

## 6 教員の研究活動

## 1) 教員による研究成果の発表状況

研究活動は、教育、大学運営と並んで、教員の主要な仕事である。表8には、教員の研究活動の状況を示した。表8に示したデータは、毎年度発行された「名古屋市立大学看護短期大学部紀要」<sup>3)</sup>に掲載された「研究活動業

表6 看護学科卒業生の国家試験合格状況

	第80回 平成3年	第81回 平成4年	第82回 平成5年	第83回 平成6年	第84回 平成7年	第85回 平成8年	第86回 平成9年	第87回 平成10年	第88回 平成11年	第89回 平成12年	第90回 平成13年	第91回 平成14年
新卒者	受験者	96	96	88	101	97	98	98	94	100	99	100
	合格者	95	96	88	101	94	96	95	92	99	99	96
	合格率	99.0	100.0	100.0	100.0	96.9	98.0	96.9	97.9	99.0	100.0	96.0
既卒者	受験者		1				3	3	3	3	1	3
	合格者		1				2	2	3	3	1	2
	合格率		100.0				66.7	66.7	100.0	100.0	100.0	66.7
総数	受験者	96	97	88	101	97	101	101	97	103	100	100
	合格者	95	97	88	101	94	98	97	95	102	100	96
	合格率	99.0	100.0	100.0	100.0	96.9	97.0	96.0	97.9	99.0	100.0	96.0

既卒者の空欄は該当なしを示す

表7 専攻科助産学専攻卒業生の国家試験合格状況

	第75回 平成4年	第76回 平成5年	第77回 平成6年	第78回 平成7年	第79回 平成8年	第80回 平成9年	第81回 平成10年	第82回 平成11年	第83回 平成12年	第84回 平成13年	第85回 平成14年
新卒者	受験者	15	15	15	15	15	15	15	15	15	14
	合格者	15	15	15	15	14	15	15	15	15	13
	合格率	100.0	100.0	100.0	100.0	93.3	100.0	100.0	100.0	100.0	93.3
既卒者	受験者						1				1
	合格者						1				1
	合格率						100.0				100.0
総数	受験者	15	15	15	15	15	16	15	15	15	15
	合格者	15	15	15	15	14	16	15	15	15	14
	合格率	100.0	100.0	100.0	100.0	93.3	100.0	100.0	100.0	100.0	93.3

既卒者の空欄は該当なしを示す

表8 教員の研究活動状況

年度	昭和63	平成1	平成2	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10
紀要号数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
著書	7	8	6	5	2	5	4	3	6	7	7
翻訳	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
論文	35	20	13	30	39	34	31	28	32	20	33
報告					3	20	18	14	12	17	8
調査・資料							9	6	6	4	12
学術講演	16	32	29	31	26	29	21	34	47	50	36
学会発表	38	31	31	37	35	20	31	27	36	28	25
合計	96	91	79	104	105	108	114	112	139	126	122

空欄は、その分類がなされていないことを示す。

績」を元に、年度ごとにまとめたものである。

研究業績の分類は、年度によって若干異なったので、「資料」には、「調査」「報告」と分類されていた業績も含んだ。また、初期には、これらの分類は採用されていなかった。

翻訳は数少ないものの、著書、論文は、毎年コンスタントに発表されていた。学術講演も年度を追うごとに増加の傾向が見て取れる。

## 2) 研究誌(紀要)の発行状況

表9には、看護短大部が編集・発行した研究誌である「名古屋市立大学看護短期大学部紀要」<sup>3)</sup>の発行状況を示した。「短大部紀要」は、当初、「誰もが、気負わず投稿できる」ための研究誌として位置づけられていた。ここでは、論文の種類は、「原著」と「その他」とに区分したが、実際に採用されていた区分は、年度によって若干異なっていた。また、論文の区分は、自己申告が基本であり、看護学部紀要で行われているような査読は実施されていなかった。

原著は5編～15編にわたり、合計掲載数は13編～22編であった。発行部数は、600部であり、各地の看護系大学・短期大学等に贈呈されていた。

## 7 施設、設備

### 1) 施設・設備の概要

表10に平成6年度末の施設・設備の概要を示した。その他、機械・器具は1,309点、標本は271点を有していた(平成6年度末)。

### 2) 図書室の蔵書数、購読雑誌種類

図書室は、表10のとおり、収容可能冊数30,000冊、閲覧座席は53席であった。図書室は、3階の308視聴覚教

室の奥、現在の演習室、自習室、書庫(大学院発足後は、大学院生室に変更予定)のところに位置した。蔵書数の推移は、表11に示したとおりである。図書室は、看護学部発足を前にして、平成10年度に当時の医学部図書館(現・総合情報センター川澄分館)に合併した。所蔵雑

表10 施設・設備の概要(平成6年度末)

区分	面積	室数	備考
看護短期大学部 校舎敷地面積	935.54		
看護短期大学部 校舎延面積	6,025.64		
個人研究室	22.26	12	
“	22.48	1	
“	23.46	1	
“	23.52	1	
“	25.62	1	
“	30.88	1	
“	48.1	1	
共同研究室	111.41	1	12名
“	60.76	1	
30人未満			1
31～50人			4
50～100人			2
101～150人			1
演習室	22.26	1	
理化学実験室	154.53	1	
成人看護実習室	158.2	1	
看護技術実習室	366.71	1	
家庭看護実習室	82.85	1	
母性小児看護実習室	193.06	1	
調理実習室	49.69	1	
専攻科実習室	125.08	1	
専攻科第2実習室	48.51	1	
語学学習施設(LL教室)	100.01	1	
図書室	292.82	1	収容可能冊数30,000冊、閲覧座席数53席

表9 紀要発行状況及び掲載論文数

年度	昭和63	平成1	平成2	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10
紀要号数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
原著	10	12	15	14	9	6	9	13	9	12	5
掲載論文数	3	5	2	8	8	13	13	9	10	7	9
合計	13	17	17	22	17	19	22	22	19	19	14
ページ数	146	192	183	248	185	193	207	213	193	190	142

表11 図書室蔵書数の推移

	昭和63	平成1	平成2	平成3	平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10
看護学	1,903	2,084	4,301	5,145	6,276	7,010	7,781	8,522	9,014	9,493	9,987
医学	2,445	2,484	4,803	5,281	6,098	6,674	7,210	7,386	7,931	8,263	8,698
一般教育	2,862	3,570	7,189	8,307	8,426	9,239	9,899	11,021	11,966	12,863	13,531
合計	7,210	8,138	16,293	18,733	20,800	22,923	24,890	28,911	28,911	30,624	32,216

## 名古屋市立大学看護短期大学部14年の記録

誌は、平成9年度で、和雑誌286種、洋雑誌4種、合計300種であった。

## 3) 学術情報システムの整備

インターネットを介した電子メールによる情報交換やWWWによる情報の共有システムの利用が進み、これらは学術研究の上でも有効かつ不可欠な手段となり、看護短大においてもそれらの早急な整備が望まれていた。実際に学内LAN (Local Area Network) の工事費とサーバ等のネットワーク機器の借り上げ料が予算化されたのは平成10年度であった。平成10年度末に看護短大内部のみの運用が実現したが、全学LANを介して、インターネットに接続されたのは平成12年度はじめてであった。

## 8 社会との連携 —公開講座の実施状況—

看護短期大学部は、平成4年度から市立大学の公開講座に参加した。毎年度の主題、演題、参加者数を表12に示した。看護系教員のみならず、医学系教員や人文学系教員も講師として、日頃の研究成果を市民に向け発信する試みを行っている。平成7年度以降は、高齢社会を背景として、「老い」「中高年」「老後」といった主題が増えている。

## 9 管理運営

## 1) 教授会組織

図1には、教授会組織と、各組織の任務分掌を示した。総務委員会～実習連絡協議会は常設の委員会であった。また、自己評価委員会は平成5年度に設置され、それ

以降常設委員会となった。四年制大学化検討小委員会は、平成6～7年度に置かれ、四年制大学化に必要と認められる事項について総合的に調査・検討を行った。学術情報ネットワークの整備に伴い、平成9～10年度にはLAN検討委員会が置かれ、ネットワークが整備された平成10年度末以降LAN運営委員会に変更された。

## 2) 事務組織

図2には、看護学部の事務組織について示した。また、その任務分掌は、表13に示した。看護学科と専攻科が置かれていたため、学部事務室の場合よりも主事1名が多く配置されていた。また、看護短大内部に図書室があったため、司書1名が配置されていた。

表13 看護学部事務分掌

- 1 短期大学部の規程、文書及び公印に関する事
- 2 教授会その他の会議に関する事
- 3 短期大学部施設の警備に関する事
- 4 入学者の選抜に関する事
- 5 修学指導に関する事
- 6 課外教育に関する事
- 7 学生の福利厚生に関する事
- 8 授業料等の減免に関する事
- 9 その他短期大学部の事務に関する事

表12 公開講座の実施状況

年度	主題	講演等の演題	参加者数
平成4年度		1) F.ナイチンゲールと今日の看護 2) 健康生活と看護	73
平成5年度	健康生活と看護	1) 聞こえますか!子どもの小さな声 2) 障害児のくらしから子育てを考える	49
平成6年度	女性の健康と生活	女性の幸せは更年期から 1) こころとからだの健康を保つために 2) 快適な暮らしのために —栄養のポイント, 運動のポイント—	81
平成7年度	老いの生活と健康	1) 老いと食環境 2) 老いの病と看護	105
平成8年度	いのちを考える	1) 最後のいのちをどう生きるか 2) 終末期のための看護の役割	106
平成9年度	中高年からの性	1) 中高年の身体の変化と医学的対応 2) 豊かな生活を送るために —身体の声聞く—	62
平成10年度	より良い老後を求めて	1) あなたの内臓年齢は何歳ですか 2) 老いと家庭崩壊	87

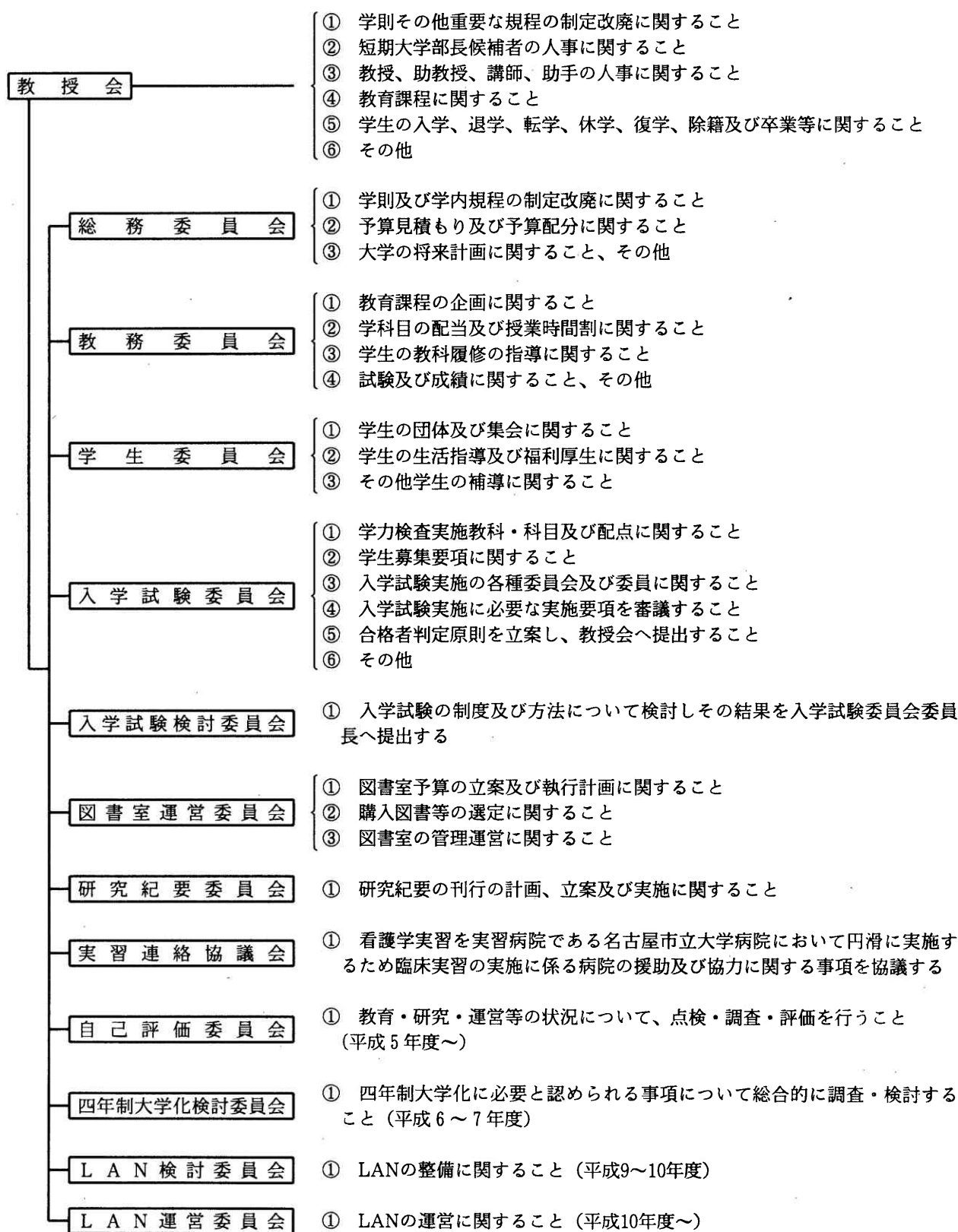


図1 看護短期大学の教授会組織

## 名古屋市立大学看護短期大学部14年の記録

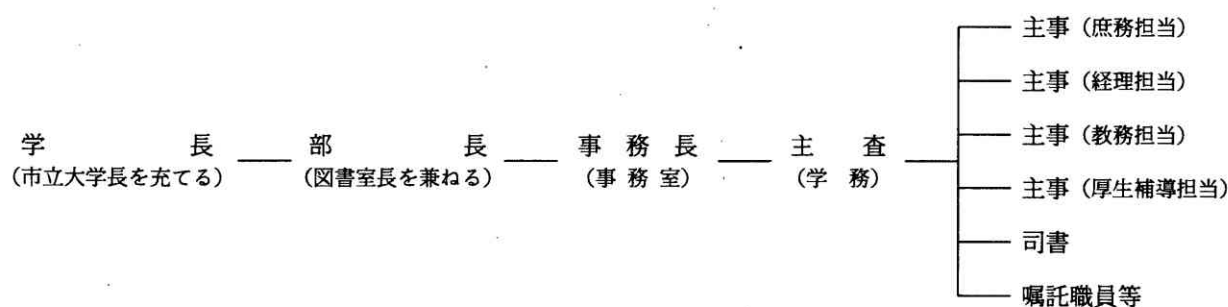


図2 看護学部事務組織

## 10 自己評価の実施状況

文部省（当時）の指導により、短期大学においても自己点検・評価が実施されるようになり、看護短大部においても平成5年度から自己評価委員会が設置された。自己評価委員会は各委員会の委員長からなり、その編集により、「きのう・今日・明日」が、「名古屋市立大学看護短期大学部自己評価報告」として7冊発行された（Ⅰ～Ⅶ、1988～1998）<sup>1)</sup>。平成5年度に発行された最初のもは、昭和63年度以降平成4年度までの自己評価が記載されている。特筆されるべきは、この自己評価報告書は、全国の公立短期大学の中では、はじめて発行されたということである。

## 11 まとめ

以上、名古屋市立大学看護短期大学部の14年間の記録の概略をまとめた。ただし、これが看護短期大学部の記録のすべてではない。ここでは、教育課程やその編成方針、進級状況、奨学金の受給状況、授業料減免の適用状況、学生生活相談、課外活動への参加状況、研究費の財源、専任教員・非常勤講師の配置状況、教員の在外研究などについては割愛した。それらは、自己評価報告書「きのう・今日・明日」<sup>1)</sup>に資料とともに詳しく掲載されているので、そちらを参照して頂きたい。

また、看護短大部の沿革については、「名古屋市立大学50年の歩み」<sup>2)</sup>に、前身の名古屋市立大学看護専門学校、さらに昭和6年7月に設立された名古屋市民病院附属看護婦養成所に遡って、その間の社会情勢や看護をめぐる状況にも触れつつ詳しく書かれているので、そちらもぜひ参照されたい。

その「名古屋市立大学50年の歩み」<sup>2)</sup>の「看護学部の沿革」では、看護学校から看護短大部、さらに看護学部へと成長したものの、看護学部独自の理念が十分に検討されてこず、新たな学部としての矜持をもって看護がどうあるべきかという根本理念から、もう一度、学部のあ

り方を再考する必要に迫られていると総括されている。本年度は、看護学部が開設されて4年目となり、完成年次を迎えた。さらに、平成15年4月の大学院看護学研究科修士課程看護学専攻の設置が目前となった。昨今、公立大学の独立法人化問題をはじめとして、大学を取り巻く環境、社会情勢が激変しつつある中で、看護短大部14年の歴史を振り返りつつ、看護学のあり方、看護学の大学教育、大学院教育のあり方について、また、名古屋市立大学の中で看護学部の果たすべき役割について、われわれ教職員が、一人ひとりの問題として捉え、何をなすべきか、何ができるかを考え、実践していくことが必要であろう。

## 12 参考資料

- 1) 「きのう・今日・明日」(名古屋市立大学看護短期大学部自己評価報告Ⅰ～Ⅶ, 1988～1998)。
- 2) 名古屋市立大学50年の歩み, 2001。
- 3) 名古屋市立大学看護短期大学部紀要, 1～10号, 1988～1998。

その他、看護短期大学部教授会議事録、看護学部教授会議事録、名古屋市立大学看護短期大学部入学案内等を参照した。

## 13 謝 辞

本稿の基礎資料を整理する上で、看護学部事務長・都築朋音さんのご協力をいただいた。また、主に看護短期大学部から引き続いて、看護学部に在職する教員には、内容についての確認をいただいた。ここに記して感謝申し上げます。